

## TATにみる15才の登校拒否男子

その他のタイトル	A Case Study of a Schoolboy (15 years old) with Refusal, specially, on the Analysis of TAT
著者	宮本 由起代, 石田 陽彦
雑誌名	教育科学セミナー
巻	23
ページ	67-74
発行年	1991-12-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00019478">http://hdl.handle.net/10112/00019478</a>

# TATにみる15才の登校拒否男子

関西大学大学院 宮本 由起代  
明和病院 石田 陽彦

## 1. はじめに

月例の臨床心理学研究会が開催され4年を経ようとしている。臨床場面に携わる人や院生を交えて、毎回事例研究を中心に学習を重ねてきた。当初はロールシャッハテストからクライエントの内的世界を探ろうとしてきたが、本例は、主題統覚検査 Thematic Apperception Test (TATと略す)を媒体に登校拒否中学生男子の理解を深めようとした初めての試みである。プロトコルから受ける研究会参加者の感じ方を基本におき、可能な限り視点を広げて検討を重ねた解釈像である。テストを通じてのクライエント理解とは何か、理解のしかた、かたよりを点検する意味を込めて発表することにした。

各図版ごとに参加者の感じ方を要約し、かわり分析的視点からまとめた。最後に全体を通じてクライエントの解釈像を考察した。臨床心理学研究会として、TATでどこまでクライエントに近づけるのか、本論の理解が妥当であるのかという問いであると理解して頂ければ幸いである。

**事 例** A君、男、14.8才、ひとりっ子  
**問題行動** 登校拒否  
**家族構成** 父は公務員(警察官)、固く真面目。愛読書は現代のエスプリでくだらない物はない。高学歴を持てばよかったと後悔。母は上品で美人。進学したかったという思いが強い。両親は見合い結婚。母には思いを寄せる人がいたが、相手の態度が曖昧なため、

26才で実母により強制的に結婚させられた。新婚時から夫婦間で性的トラブルが生じた。夫の存在が嫌でたまらない。離婚願望は強いが、子どもと別れ難く現在に至る。夫との生活が苦痛で家庭の雰囲気は暗かった。子どもの症状が消えると母はうつ病になった。自殺願望が強い。

## 2. 図版の分析

TATの分析に入る前に、TATがパーソナリティのどういう側面を捉え、どういう人格理論を背景に成り立っている心理検査であるのかについて、少し説明を加えておきたい。

TATの創始者、H・A・マアレの人格理論の中心をなしているのは欲求-圧力理論である。マアレは、人の複雑な行動を、環境とそこにおかれた生活体の反応との関係から捉えようとして、そのパーソナリティの反応を生ぜしめる源泉を「欲求」、環境がパーソナリティに対して働きかける方向性を「圧力」と考え、この欲求と圧力の力学的相互関係から理解しようとしたのである。

この人格理論を具体化する試みとして、TATが出来上ったと言ってもよいであろう。TATは、文学的創造力を刺激し、かくされたコンプレックスや、無意識のコンプレックスを暴露するような空想をおこさせることを目的としてつくられた。

使用されている図版は、30枚の絵と1枚の白紙から成り、成人男子(14才以上)、成人女子、

少年、少女のそれぞれ20枚1組として与えられるように出来ている。教示は「これは想像力の検査です。これから、あなたにいろいろの人や景色の描かれた絵を見せます。この絵を見て思い浮ぶ物語を作って、私に話して下さい。……この絵の中の人は、今何を感じ、どうしているのか、この絵の前にはどんなことがあって、この絵の後にはどうなっていくのか、お話の筋をつけて、だいたい5分ぐらいで話して下さい。」と言った具合である。結果の分析は、1枚ごとの物語について個々に行なわれ、ついで、それらに一貫する重要な諸傾向を整理し、それらの相互関係をも検討することによって、パーソナリティを理解しようとするのである。

TATの分析法や解釈法については、代表的なものは幾つか存在するが、未だ標準的なものがなく、研究者一人ひとりによって異なるというのが現状である。

#### <カード1>

「いたずらにヴァイオリンを弾いてそれが認められた。それで学校に勤められた。この子は、はっきりといてヴァイオリンが嫌いで、今日ヴァイオリンの稽古に行かされる。これからもよく行かされるのところがうか。－嫌いなヴァイオリンを習わされているのやね。それで－自分勝手にやめる。－両親はどんな気持ちを持つ－初めは知らないけど後で段々判ってきて、結局習わすのをやめさせる。」

#### [メンバーのコメント]

- a. A君の意志は通じず、両親の価値観を子どもに押しつける家族システム。今までの抑圧が爆発し、存在主張の意志が見られる。両親が自分を受容するという希望を持つ。
- b. いたずらにという言葉には通常人の目を意識する意味が含まれるので、A君は両親に挑発的で駆引きをしている。

- c. されるという表現が多く、自我の未成熟さが目立つ。
- d. 言葉の伝え方がまずく、自己主張への願望は強い。

#### [かかわり分析]

プロトコルからかかわり様式を探ると、A君は気持ちをうまく伝えられず、意志に添わないことでも受け身的に行動してしまう。常に他者からのさせられ意識を持っている。心の奥には反発がうづまき、両親と会話することなしに行動化しようとする。そして、自分を受け入れてほしいと希求している姿が浮び上がってくる。形式的特徴は、断言的でさせられ感情に満ちている。人と分かり合う関係を持つとせず、心は冷えている。他者が折れることによって、自分を認めさせようとする依存心が見える。

恐らく、A君の家庭では、圧力をかける両親と本意ながら従ってしまうA君という家族システムが成立しているのだろう。その中で身動きがとれないのだが、両親とは正面から向き合えないために不全感を抱いている。そのため行動は、概して非合理性を帯びてしまう。

#### <カード2>

「何か田舎の方で、それで、他の人は農業で働いているのだけでも、この女の人だけは、将来立派になりたく町の学校に通っている。今、みんなから学校へ言っても無駄だと言われているけども、段々成長して、何か立派なことをやって、将来この村に戻って来るけど、村人はまだ無駄だろうと思っている。この人自身無駄ではないと思っている、将来何か必ずやると考え、村人の古い考えを払いのけようと思っている。」

#### [メンバーのコメント]

- a. 自己主張として登校拒否という行為をしているが、立派になるということが学校と結び

つく。学歴志向の価値観を取り込んでいる。

- b. 拒絶には反発心を持つが、対決できず空回りする。
- c. 相手の立場を受け入れようとせず、コミュニケーションを拒否する。
- d. 両親の価値体系を、自己の中で再吟味せずに取り込んでいる。
- e. 平凡ではいけないというしんどさを感じる。どのように立派になるのかが漠然としているので、出口が見えない。

#### 【かかわり分析】

かかわり様式は、何をしても受容されないというあきらめ、孤独感のなかにいる。支持や支援のない関係。他者と協調する気持ちになれず、自分の世界に閉じこもる。形式的特徴は、主人公の思いの世界で、他の人物やものとの関係性が軽視され、人物設定の明確化もない。人間関係が乏しい。暖かい交流のない家族関係のなかで、疎外感、孤独感を深めているのだろう。理解しあえない家族という思いに固着し、自己開示を拒否している。

#### <カード3>

「多分男の人・昔、悪いことをして、今刑務所の中に入っているけれどもね。この人自身何もしてなくて、他の真犯人から、この人がしたように仕上げられちゃって、それで裁判で死刑が決まり、こんな格好をしている。別の場所に護送する時、うまく逃げて、今度は真犯人を探し出すだろう。－どういう罪を負わされたの－殺人かなあ。－捜し出せるのかなあ－多分探し出せるのところがうかなあ。」

#### 【メンバーのコメント】

- a. 両者ともA君自身で、死と再成を意味している。抑圧されているA君が、自由な自分を模索している。
- b. 両親にからめられ、閉塞感で息ができない

状態のようだ。

- c. どん底の状態から立ち上がろうとする強い意志が感じられる。
- d. 起こりそうもない状況のなかに、解決策を見い出そうとする。
- e. 現状の原因は、自分ではなく他の力によるという認識を持っている。

#### 【かかわり分析】

自分の行動に罪悪感を持つが、それを認めたくないA君。原因を外界に求めたが、その存在は大きく身動きできない。推量の表現が多く、断言をさける。拘束と極限の設定は、重苦しい、悲感的な内界を示している。自信のない、不安に満ちた世界にいるのだろう。先の見えない恐怖から、両親への怒りがつり非合理的手段に訴えようとしてしまう。

#### <カード4>

「戦争のなかで、それでこの敵国に行ってスパイをしなければならぬ任務を背負って、別れを告げに自分の家に帰って来たけれども、この男の人自身、任務を言い帰って来た。この人（奥さん）は、危険だからやめてくれと頼んでいるけど、どうしてもこの人は敵中に侵入して、この人はついに帰ってこなかった。－この女の人は－その田舎の方に行って、ひっそりと暮らすだろう。－この人には子供がないの－ない。」

#### 【メンバーのコメント】

- a. 社会に出ようと試みるが、危険で厳しいように思われ踏み出せない。自我未成熟。母への依存性。
- b. 自己同一性の確立への試み。それを阻む母親。密着した母子関係。A君のあがき。
- c. テストの進行にともない内面に入っていく自分を予感し、その危険性への防衛。
- d. 社会に出るには、自分は情報不足だと感じ

ている。

#### 〔かかわり分析〕

「べき」の規範で動こうとするが、外界は恐ろしい世界に見える。A君には決死の覚悟があるので、とても達成できないと感じてしまう。宣告、説教、拒否の構成は、生活場面への彼のかかわり方を象徴している。悲劇的な終結は、日常的にもっている彼のイメージと思われる。母に対するA君の感情がよく出ているカードで、母への厳しい敵意と憎悪が表されている。しかし、母から離れられない自分がある。

#### <カード5>

「この女の人は、前に自分の子供が殺されたことがあって、それで、その子が殺されてからその子の夢ばかり見て、それから、その子の声がして、今は誰もいない。この人は、ノイローゼになっちゃって絶対に生きていて思っていて、多分この人は、死ぬまでこの部屋を覗き続けるやろう。」

#### 〔メンバーのコメント〕

- 引き続き母子関係が明確化された。A君が自立した後の母のイメージ。自己を持たぬ母が精神障害に陥るという思い込みが、A君に罪悪感を抱かせる。
- 部屋を覗くという行為が現実にあって、A君のプライバシーがないのではないか。性的欲望が、うまく処理されているのか疑問。
- 成長しない息子の姿を求め続ける母。
- 父親の不在。夫婦関係がA君の重荷になっている。

#### 〔かかわり分析〕

息子の巣立ちを受け入れられない母の姿を執拗に描写。母子感情の交流パターンが出ている。息子の自立を疎止しようとする母の姿が、A君に母の悲哀感、喪失感を過大に認識させ、自責を生じさせる。自分が自分であり得ないという

恐怖が、母への敵意と憎悪になって表出。しかし、受容体験の欠乏から、強い愛情欲求があり、いつまでも依存していたい彼もいる。

#### <カード6 BM>

「この男の人は、昔、このお母さんの反対するところに就職して、遂にお母さんの手の届かない所に転職命令が出て、最後の別れを言いに行ったけど、このお母さん、もう飽きられちゃったのか、この子を気持ちよく出してくれて。それで転職先に行っちゃったのだけど、この男の人は、自分のお母さんのことが忘れられなくて、こんな所に勤めなければよかったと思って、自分の好きだった会社を辞めて、このお母さんのいる地方に帰って来て、そこで勤めるだろう。」

#### 〔メンバーのコメント〕

- 母を捨て切れない自己を自覚している。
- 内容を伴わない形式的自立で、母の態度が軟化すると見捨てられ不安から、母と分離できない。
- 父親欠落によるA君の夫役割が成立している。心的成長としての父性役割は失敗。

#### 〔かかわり分析〕

見捨てられ意識が強く、自分の意志が通じる状況になると不安感が増大するA君。反発心は萎んで依存欲求が高まる。代理夫という位置づけのため、生き方、目標、自己確立ができないA君。禁止には反発するが、生き方の指針がないので、単純な反発行為に終わってしまう。防害がないと依存欲求が増すという心理構造を、母は把握しているのかもしれない。日常生活でも、大人のようなかけ引きがおこなわれている可能性がある。

#### <カード7 BM>

「この歳のいった人は暗黒街のボスで、この

人は、それを知らずに近づいて行って、ついに深入りして悪事をそそのかされ、こういうことをしたら礼はたっぷりやると。遂にやっちゃうのだけど、やってから自分のしたことに気がついて、結局は自首するだろう。」

〔メンバーのコメント〕

- a. 家庭で父の価値観が家族ルールになっているのではないか。また、家族のタブーは潜在的なものとして存在しているため、A君は気づきにくかった。
- b. 両者ともA君自身。性的なめざめを覚え、その世界に踏みこむが、自責のために母に告白する。
- c. 父を権威的、否定的に認識
- d. 思春期男子に見られる異質な価値観への希求。

〔かかわり分析〕

父に権威を感じ接近する。影響を受けるが自分にとって不都合な操作だと感じ回避した。父子関係で父との同一化に失敗。社会に対し不安に襲われ母の庇護に入ろうとする。性的めざめとその行為という見解も出たが、これまでの流れから、自己確立すると社会に踏み出さねばならないという葛藤が語られていると理解しているのではないか。

<カード9 BM>

「昔、いい所だと思って勤めたところが、最近すごく悪いところだと分って、その勤め先の主人というか、主人に反抗して、ついにストライキをして、主人は一向に知らぬ顔をしていて、ちっとも改めようとはしない。しかし、この人たちは、何年かかっても改めなければならないと思っていて、それで、結局いつになってもこの主人は分らないだろう。—それでみんなはその主人が分るまでこれを続ける。」

〔メンバーのコメント〕

- a. 大人びた子どもという印象。大人と子どもっぽさが同居している。
- b. 登校拒否に対する合理化。父性、母性に抵抗している。
- c. あきらめの気持ちが強いが、言語化しているのは、抵抗するとの宣言とも思える。
- d. 保守的で頑固な父との葛藤。自己主張するが認められることはない。あきらめずに、社会的に認められる手段にかえて、抵抗を続けようとしている。

〔かかわり分析〕

行動するが認められないという設定は、過去の経験を示しているように思われる。早く成長したために、両親や社会の矛盾が見えすぎる。抵抗を示すが取りあわれず、外界に厚い壁を感じてしまうA君。今までの非合理的手段にいきづまり、合法的手段への転換を志向し始めた。時代にそぐわない父の存在が家族を抑圧しているのだろう。

<カード11>

「この崖ぶちを歩いてきた行者が、突然迷い込んで、いろいろな所を歩き廻ったけど、今、こうして突然怪物が出てきてこの人たちを襲うが、この人たちは足を踏みはずし、その変な世界から偶然抜け出したが、見覚えのあるところで気絶して、みんな倒れていた。」

〔メンバーのコメント〕

- a. 現実に違和感を持ち、心は不満で満ちている。
- b. 何か分らないが、2つの世界を出たり入ったりしている。
- c. 不登校（怪物）で、不本意な世界から抜け出せそうに思ったが、何も解決しなかった。
- d. 感覚的になって、自己統制がとれなくなってきた。本来怖い怪物が、逆に救世主に感じられる。とまどい、不安な状態。

e. 頭でっかちで、いろいろな問題提起をする。自我にめざめた時、父に対決するには非力な自分を感じ、自己被害の少ない学校に抵抗を投影している。

〔かかわり分析〕

これまでの道程が描かれている。つらく苦しい思いで試行錯誤を繰り返してきたが、行きづまり精根尽き果てた。どうすることもできない無力感。幻想的な物語の構成は、A君が現象の場に大きな違和感を抱いているのを示している。追い詰められた結果、解決法を力の及ばない奇蹟的なものに期待し、安定できる場に身を置くことを強く望んでいる。

<カード12BM>

「今まで平和だった地球が、突然大洪水に襲われて、今までのものは跡かたもなく壊されたんだけど、ある一家だけは奇蹟的に助かって、まだそれから、あたりを見渡したけど誰もいず、この辺で生きているのは俺たちだけだと思っている。本当に生き延びたのは、地球上でこの人たちだけで、またもとのように人間の世界が生まれ変わるか、それとも滅びるかは、この人たちだけにかかっている。－それで地球は－また地球は、ひょっとしたことからみんな喧嘩しだして、しまいには地球上から人類が滅びるやろう。」

〔メンバーのコメント〕

- a. 人間の世界とはA君自身の世界で、心の平安な世界を求めているが、それは家族にかかっている。テスターに対する甘えが出ている。
- b. 今までの秩序、体制、人間関係すべての消滅を願っている。根本的解決策にならないと自覚していて、他力本願に頼る自分を自嘲している。
- c. 家族への情動を表出。家族は必要で離れら

れないが、その関係性はどうにもならない。  
d. 図版との認知的距離から離れ、本来の問題が出てきた。中学生らしい表現。今まで、不自然に思考統制していたのかもしれない。

〔かかわり分析〕

安定していた状態が崩壊した時の家族関係。危機的状況になっても、互いに傷つけ合う家族に絶望感が湧いてくる。家族に希望を見い出せず、自暴自棄になっている。心の葛藤が大きすぎて、社会からとり残された思いを持つ。平穩な自分の世界が築けるか不安で、家族内葛藤は行為にまで及びそうな気がして、混乱から脱出できそうに思えない。

<カード14>

「この人は、ちょっとしたことで国王に反対して、高い塔に閉じ込められて、ここからは永久に出してもらえない。何とかして逃げることをしたが、みんな失敗に終って、今こうして諦め、窓から外を眺めているのだけど、結局一生逃げられなくて、この牢で死んじゃった。－死ぬ時は、どんな思いをしたかなあ－死ぬ時、結局自分のしたことは正しかったと思って死んでいく。」

〔メンバーのコメント〕

- a. 各図版の結末が、そろって悲劇的。あきらめ、無力感に満ちている。
- b. 自己正当化と自分の弱さとの感情的ギャップが特徴。正当化は弱さの裏面だ。
- c. 同じ形の自己主張を繰り返し、いつも自分が傷つくことになる。
- d. 父も夫婦関係も変化しないので、母子関係が変わらないという絶望感。
- e. 絶対的秩序に従うよりは、創造的主体性をつらぬいて死ぬほうがいいと思っている。諦めてはいない。諦めれば服従するだろう。

〔かかわり分析〕

権力に反抗するが、どうしても勝てない。ワ  
ンパターンでせめ、自滅を繰り返すあいだに虚  
無感に捉われる。執拗な自己正当化の表明は、  
A君のナルシズムを表しているのかもしれない。  
あるいは、表明することで自我の崩壊を防  
御しているのだろうか。

#### <カード15>

「この人は、昔から伝わっている伝説で、年  
に1回、12月31日になるとこの墓石が起きあ  
がっている伝説を（他は信じていない）信じて  
いて、実際に、このことを確かめようとして墓  
にきて、そろそろ石が揺ぎ始めると思って、  
じっと見守っている。いくら待っても墓石が揺  
ぎ始めないので、あれは嘘の伝説と思って帰ろ  
うとした時、揺ぎ始めた。この人を墓に引きず  
り込んで、また揺ぎが止み、何事もなかったよ  
うに静まり返った。」

#### 〔メンバーのコメント〕

- a. 墓石は秩序で、秩序の中にひきずり込まれる意識がある。
- b. 取り込まれ従えば、一見平和な静寂が漂うが、底にはドロドロした情緒がうづ巻く。
- c. 12月31日というのは、自分の状況に何か新しい展開が起ころうだという象徴だろう。
- d. 飲み込まれて新しい自分になりたいと、自分の能力と無縁な解決法をとった。
- e. 無意識の衝動に立ち向かおうとしたが、衝動に負けてしまった。

#### 〔かかわり分析〕

状況が動いた時の、A君の構えや態度が出て  
いる。膠着状態では冷静にいられるが、動きが  
あると無力になるA君。家族的自我に抵抗して  
いたが、自己の中にある家族的自我を意識する  
ようになった。妥協できる部分を取り入れ解決  
しようとしたが、あまりにも強い存在だったの  
で、飲み込まれてしまった。

#### <カード19>

「今まで、この地方は何事もなかったのに、  
5年ほど前から毎年10月30日前後になると、今  
まで暑かったのが寒くなり、作物がだめになる  
のに、そのうち被害にあった一人が何かのたたり  
と思って村から逃げ出し、荷物をまとめている。  
この人の家に、この闇の中から眼球が2つ  
光りこの状態になり、この人の家の廻りを取り  
囲み、ついに嵐でバラバラにこわし、この人た  
ちは雪の中に埋もれて死ぬ。このことがあって、  
他の人たちは恐がってこの村から一歩も外に出  
ない。」

#### 〔メンバーのコメント〕

- a. たたりは地縁的で人を縛るものだから、地  
域から脱出できないと感じている。
- b. 問題には触れず、息をひそめていた方がい  
いのではないかと思っている。
- c. 逃げさせてくれない目。自分の内か外かは  
不明。超自我か父の秩序か。
- d. 家族関係に両親の目が向かないように、自  
分が問題をつくることによって、平和を維持  
しようとした。

#### 〔かかわり分析〕

家族と周囲との関係と見れば、見張られ感の  
ため地域社会が恐ろしく、家族が閉鎖的になっ  
ている。不安と恐怖の感情が、家族間に漂って  
いる。母の自殺企図が、A君の外傷体験となっ  
て、家に閉じこもるようになったのかもしれない。

### 3. A君の解釈像

人とのかかわりを避け、頑固で融通性のない  
父と、主体的な生き方がない母を両親に持った  
A君は、ガラス細工のような繊細さともろさを持  
った少年のようだ。対人関係が苦手な、文字  
からの情報は身体を通過していくばかり。経験



が内面化されないために、思考や価値観が実感として定着していない。知識と体験が分離しているので、外界や自己の把握に未熟さが目立つ。夫婦関係の破綻や母の自殺企図が、A君に見捨てられ意識を抱かせ、不安を感じるようになった。要求水準や支配性は高い方だが、情緒統合はとれていない。自我防衛力も低下しているの  
で、傷つきやすく外圧に弱くなっている。

存在証明ができない母は、敵意を秘めながら、不安から逃れるために母子密着をやめられない。A君のかかわり様式は、両親を通じて学習されたものであり、その成果が登校拒否であろう。本例では、治療の焦点を夫婦の自己解放におき、治療的アプローチとして、家族全員が、自己の人生の主人公になれるように、家族療法が適していると思われる。

#### 4. おわりに

子どもの事例では、親の生き方、価値観が問われるといっても過言ではあるまい。特に生き方から生じる不安や欲求が、子どもに大きく影響を与える。両親のいる場合には、夫婦の力関係、抑圧構造が、子どもの自我成長に深く関係してくるので、子どもの行動を理解するにあたり、夫婦関係に注目することが不可欠になる。

本論では、参加者の感じ方に重点をおいたために、A君個人の解釈は多岐に及んだが、夫婦

関係を充分論議できなかったのは残念である。従来のテスト解釈法の限界かもしれない。

テストのもつ意義が、クライアントの理解に役立つという点にあるならば、クライアントに役立つために、テスト結果から何を読みとるのかということは、今後大いに議論される必要があるだろう。

#### 参考文献

- 坪内順子 1984 T A T アナリシス 坪内出版  
木村 駿 1964 T A T 診断法入門 誠信書房  
山本和郎 1966 異常心理学講座第二巻心理テスト  
T A T - かかわり分析法 - みすず書房  
山本和郎 1964 心理学評論 診断的理解と治療的理解の本質的相違  
I. D. グリック、D. R. ケスラー、鈴木浩二訳  
1983 夫婦家族療法 誠信書房  
ヘレン・A. ドゥローシス M. D、斉藤 学訳  
1983 女性の不安 誠信書房  
空井健三 1974 マレーの欲求-圧力理論と絵画統覚検査 佐治守夫編 臨床学の基礎知識 有斐閣  
H. A. マアレ、外林大作訳 1960 パーソナリティ I, II 誠信書房